グローバル戦略も強化

学校法人 大阪滋慶学園

滋慶学園グループの学校法人大阪滋慶学園は、「グローカル生涯教育」での人材育成に力を入れている。育成した人材は日本だけでなく世界の幅広い分野で活躍しており、注目を集めている。また、4月に開校を控えた鳥取市医療看護専門学校が、地方創生のモデルとしてどのような効果を地元にもたらすかが期待されている。

鳥取市医療看護専門学校4月に開校

大阪滋慶学園は4月、鳥取市に「鳥取市医療看護専門学校」を開校する。学校長には橋本勝信常務理事が就任する。将来の地域医療を担う医療人の育成を通し、地域の活性化に幅広く貢献していく。

大阪滋慶学園は「グローカル人材」の育成に30年以上にわたり取り組んできた。「グローカル」とは、グローバルとローカルを掛け合わせた言葉。世界的な視野で事象を捉え、地域視点で行動するという考え方だ。アメリカや中国とのつながりを強め、特に中国からの研修生の受け入れは活発だ。2015年度には約300人の受け入れを見込んでおり、世界的規模で、医療に関わる人材の育成に貢献している。

グローカル生涯教育は、いわば地方と都会の差を無くすための生涯教育。都会と地方、もしくは国内と海外をつなぎ、情報や人の行き来を活性化させることで双方の発展を目指す。鳥取市医療看護専門学校も、グローカル人材を育成するための重要な拠点のひとつとなる。

2025年問題と呼ばれる超高齢社会の到来は目前だ。在宅医療でのケアを必要とする高齢者の増加が考えられるが、看護師や介護士をはじめとする医療人材の不足が懸念される。特に地域医療における人材不足は深刻だ。

「鳥取市医療看護専門学校の開校をきっかけに、地域医療の精度向上はもちろん、雇用の創出や企業誘致が期待できる。若者が多く活躍できる場にすることで、少子化対策にもつながる」と橋本勝信学校長は力を込めて語る。同校を地域活性化の拠点にしていく考えだ。

開校場所はJR鳥取駅の間近。1600平方㍍の敷地に鉄骨造り6階建て校舎を建設。延べ床面積は約6100平方㍍の規模となる。看護学科（3年制80人）、理学療法士学科（同40人）、作業療法士学科（同40人）、言語聴覚士学科（4年制大学卒業者〈卒業見込みも含む〉対象・2年制40人）の4学科を開設する。

大阪滋慶学園だけでなく滋慶学園グループの持つ全国規模のネットワークを生かし、教育から就職、卒業後のキャリアアップ支援まで学生をサポートする。また、立地の利便性の良さを生かして地域行事や医療介護関連のセミナーなどを積極的に開く。

「地域医療には教員、学生、地域職員や住民の方々の協力体制が欠かせない」（橋本学校長）。地域の交流の場として、オープンな学校にしていく方針だ。

▲グローカル人材の育成と、地域活性化の新たな拠点として4月に開校する鳥取市医療看護専門学校

医療人材、地域で育てる

地域での活躍に期待

鳥取市長　深澤 義彦氏

高齢化の進展とともに医療のみならず介護・福祉の現場においても看護師をはじめとする専門職の需要は、ますます高まっています。また、理学療法士などのリハビリテーション専門職の養成校は、鳥取県東部地域では初めての開校となります。専門的な知識だけでなく、地域の情勢にも精通した「地域医療専門職」の人材育成と卒業後の地域での活躍に期待しています。

鳥取市立病院 鳥取市病院事業管理者　清水 健治氏

積極的に支援したい

鳥取市医療看護専門学校の開校まことにおめでとうございます。鳥取県東部では医師、看護師をはじめ医療スタッフの不足が深刻で、開校が大きな福音となることを期待しており、当院としても積極的な支援を行いたいと考えております。我々医療従事者には、正しい知識と確かな技術、そして豊かな心が求められます。学生の方々には、患者様を大切に、仲間を大切に、そして最後に自分を大切にする豊かな心を鳥取の穏やかな環境の中で培っていただきたいと考えています。

開校にあたって　地元各氏からメッセージ

鳥取大学学長　豐島 良太氏

鳥取市医療看護専門学校の開校、まことにおめでとうございます。

看護学科に加えてリハビリテーション関係の3学科が設けられており、鳥取県東部の医療や福祉の一層の充実が待望されます。

中でも、鳥取県内唯一の設置となる言語聴覚士学科は「話す」、「聴く」、「飲み込む」といった日常の基本的機能の障害に対応した専門職の養成を目指すもので、高齢者の増加に伴って、今後一段とその必要性が増す重要な分野ですので、大いに期待しているところです。

鳥取市市政顧問（前鳥取市長）　竹内 功氏

地方創生に効果多大

2012年の春以来、地元医療関係者の強い要請を受け、鳥取市医療看護専門学校の誘致・開校に向け、鳥取市と東部4町が力を合わせて取り組みました。改めて大阪滋慶学園の英断と素早い対応に心から敬意と感謝を表します。開校により、看護師やリハビリテーション専門職を目指す地元の人たちが安心して専門知識を学び、地元で研修し、国家資格を取って地元で働くことができます。地域の医療・福祉力を高め、地元からの人口流出を減らすことのできる、効果的な「地方創生」策と言えましょう。

医療安全の担い手羽ばたく

第3期生に修士号　滋慶医療科学大学院大学

第3期生の学位記授与式には医療関連などから多数の来賓が出席した（ガウンと角帽を着用しているのが修了生と学校関係者）

滋慶医療科学大学院大学では2015年3月に18人の第3期生が「医療安全管理学」修士課程を修了し、医療安全をリードする活躍が期待されている。

学長の武田裕氏（大阪大学名誉教授）は「11年の開学以来成果は出てきており、修了生らは病院の中で医療安全のマネジメントの役割を果たしている」と話す。

一方で、多様な現場の教育ニーズに応えるため「医療安全実践教育研究会」を14年3月に立ち上げた。医師や看護師以外に、医療に関連する幅広い職種間で連携を深めた医療業務推進への貢献が狙い。

1月には第2回学術集会を大阪市北区の大阪大学中之島センターで開いた。

現場ニーズ汲む　医療安全実践教育研究会で

大阪市内で開かれた学術集会（1月25日）

「多職種連携による医療安全教育の展開とその方法論」をテーマに11本の講演やシンポジウム、演題発表が行われた。会場には学校関係者や医療従事者ら11人が訪れた。

講演では、高齢化社会の到来を見据えて、在宅・地域医療の体制など医療を取り巻く環境変化を見据えた議論を展開。医療機関と地元のネットワーク作りが重要とし、地域の支援体制や在宅医療を担う機関や人材確保の必要性を指摘。大会長講演として武田学長は「医療と介護がうまく連携するための包括的な仕組みを作らなければならない」と述べた。今後も年1回程度の研究会を実施し、実際の現場で起こる事象や経験談を研究し、医療安全の普及を目指す。

修了生、決意を語る／学長から贈る言葉

医療安全の先導役たれ

滋慶医療科学大学院大学学長　武田 裕氏

「医療安全」は重要な課題です。

その一方で学問としてのモデル確立は難しく、実践に頼る部分が大きいのも事実です。私たちは医療現場での実践科学分野を注視し、柔軟な発想と対応力で医療安全をリードできる人材の育成に取り組んでいます。

卒業後も、学んだ経験をきっかけに学び続ける姿勢が大切です。地域の包括ケアと医療安全を実現するリーダーとして、「人間力」を持って活躍し続けてほしい。

日本発の医療安全のあり方を、世界に広げていきたいと考えています。

安全確保への貢献責務

大学院大学第3期修了生　加藤 慎章氏

裾野の広い分野である医療安全を構築する上では、医療スタッフ・医療機器・医療環境などのさまざまな要因を考慮する必要があります。滋慶医療科学大学院大学では医療情報学・認知心理学・人間工学など関連講義が多く開講されており、さまざまな視点からのアプローチをするために有益な学びとなりました。

修士論文では医療機器のアラームについて分析を行いましたが、その結果からも医療従事者への教育の重要性が考察されました。この結果を踏まえ、臨床工学技士として医療機器の安全な使用に貢献することが一つの責務と考えています。

病院での初実習前に行う戴帽式（大阪保健福祉専門学校）

看護と介護の連携実習

大阪保健福祉専門学校

超高齢社会に突入している日本では、医療と介護の連携は喫緊の課題だ。大阪保健福祉専門学校では、昨年5月から看護学科と介護福祉科の共同授業と実習を開始した。チーム医療で必要な多職種間での連携の大切さを、実践教育を通して浸透させるのが狙い。

医療・看護分野と介護・福祉分野の間には隔たりがある。それを解決するには他の職種との協力体制の構築と、複雑化するニーズに適応できる人材の育成が必要だ。今後増えていく在宅医療には、職種の領域を越えたサポートが欠かせない。

▲戴帽式は看護師として決意を示す場でもある（大阪医療看護専門学校）

看護と介護の連携授業を通して、双方の役割の理解が進み、価値観の共有化にもつながる。

大阪滋慶学園はこれまで700人以上の看護師を輩出してきた。近い将来の在宅医療の増加を見越し、2015年度から大阪医療看護専門学校の定員を倍増させ、高齢化社会の需要に応える。認知症サポートの教育も行うなど、実践で役立つ技術を身につける機会を学生に提供していく。

価値観の共有が大切

大阪保健福祉専門学校副学校長　豊田 百合子氏

今後増える在宅医療には、チームワークが欠かせない。

チーム医療で大事なことは、各職種の人たちが、互いに価値観を共有し連携すること。看護と介護の連携授業を通し、相互理解と連携の難しさ、問題点も見えてきた。

縦割りの役割分担ではなく、包括的なサポートができる人材を育てたい。連携授業を進めるなかで、「交流で仲が深まった」、「互いの仕事をもっと学びたい」との学生の声が聞こえてきた。

大阪滋慶学園のグループ力を生かし、看護・介護以外の領域との連携にも取り組んでいきたい。

提携校の開拓積極化

東南アジアで　国際医療人材育成

大阪滋慶学園は、東南アジアに提携校を作るための取り組みを活発化し、グローバル戦略強化を図る。ミャンマー、ベトナム、タイ、マレーシア、台湾、マカオでの提携校の開拓を模索しており、中でもミャンマーでは、医療工学技士や臨床工学技士の育成のためのプログラム開設が目前で、6月よりカリキュラムやシラバス作成など、具体的な準備段階に入る。

アジア各国から、主にメーカーや商社などの企業が、人材育成の協力を大阪滋慶学園に働きかけてきているという。医療分野の技術者の育成を通して、各国で実績を作り基盤を固め、そこから提携校の開拓に着手していく方針だ。

14年度、大阪滋慶学園の卒業生が廣州中医薬大学院大学の修士課程を修了

提携校のひとつに、中国の廣州中医薬大学がある。2014年度、大阪滋慶学園の卒業生2人が修士課程を修了した。語学の壁が課題となるが、論文作成などをサポートする体制も、中国人スタッフを擁することで対応している。漢方の技術を取り入れ、同校の教育プログラムのさらなる充実を目指す。

今後、新たにアメリカに2校、中国に3校の大学と提携する。アメリカ、中国、アジアを合計すると、提携校は24校になる予定だ。国際規模での医療職業人の育成と、ネットワークの強化が進んでいる。

日本のみならず、世界の医療サービスの向上に、人材輩出を通して貢献していく。

社会人の生涯教育応援

滋慶医療経営管理研究センター

高度化し複雑化する医療・福祉業界では、卒業後のキャリア教育に注目が集まっている。日々進化する専門知識・技術のキャッチアップや制度の改定、新人から中堅・管理職へとステップアップする過程で求められる役割・能力の涵養など、先進的かつ多角的な実践教育が求められている。

滋慶医療経営管理研究センターは、大阪滋慶学園グループ内で生涯教育機関として位置づけられ、さまざまな角度からキャリア開発をサポートしている。

約3万1000人の卒業生や265社にのぼる医療・福祉業界の法人会員事業所を対象に開催しているセミナーもその活動のひとつ。2007年以来、すでに40回以上実施している。

14年10月には、スギホールディングス代表取締役会長の杉浦広一氏と代表取締役副社長の昭子夫妻を講師に迎え「かかりつけ薬局への歩みと挑戦～地域包括ケアを担う医療人を育てる～」をテーマとしたセミナーを開催。看護師をはじめ現役の医療従事者を中心に多数が受講した。

医療経営管理セミナー

杉浦会長より創業期のエピソードや企業理念が紹介され、その人柄と軽妙なトークでほぼ満席の会場は和やかな雰囲気につつまれた。杉浦昭子副社長はスギグループ発展の過程を交えながら、グループが目指す超高齢社会・地域包括ケアに対応した地域密着型ドラッグストアの展望や人材育成における地域・社会貢献活動の重要性について語った。

両氏が社外で講演することはめったにない、とても貴重な時間となったようだ。